

沖縄県の米軍軍用地内の黙認耕作

基地の受容/反対を超えて

福田真郷（京都大学大学院人間・環境学研究科）

沖縄県に所在する米軍軍用地内における農耕、通称「黙認耕作」は、その過度な政治性により「語りにくい」ものとして触れられてこなかったが、本発表は、その黙認耕作を文化人類学的な視座から検討する。基地と地域社会または個人の関係性に注目するが、本発表は、必ずしもそうした二者の関係に留まらない複雑な位相を提示し、単純な基地容認、反対の二元論に对抗し、地域社会と基地の関係性に新たな側面を提示することを目的とする。

沖縄県には、日本の米軍基地の大半が所在する。県中南部は特に基地の占める面積の割合が高い地域である。在沖縄米軍研究は、近年文化人類学でも行われるようになってきたが、中でも米軍基地の軍用地問題は、近年ようやく注目されてきたトピックである。軍用地問題は、軍用地の返還後の開発、軍用地料の分配をめぐる問題、基地の中にある旧集落とのつながりなど、多くの論点を内包しており、今日の沖縄社会を考える上では避けて通ることはできない。

沖縄では、戦中から戦後にかけて、米軍による強制的な土地収奪が行われた。そのため、県内の軍用地は民有地の割合が高くなっている。この結果生まれる問題として、まず軍用地料問題が挙げられるが、発表者は「黙認耕作」に着目する。

黙認耕作とは、フェンスの内外を問わず、米軍軍用地内の使用されていない土地で、一定の制限と米軍の裁量の下で住民の耕作を許可するというものである。多くの場合、基地周縁に設けられた「グリーンベルト」と通称される緩衝地帯や、フェンス内の空き地で行われている。

黙認耕作権は、1956年からの「島ぐるみ闘争」の結果、1959年に制定された琉球列島高等弁務官布令20号の中に法的根拠を持つが、一部の地域では戦後間もないころから「黙認」されてきた経緯がある。本土復帰後も、何ら戦後処理もされないまま、一応は日米地位協定3条を根拠に耕作が続けられている。土地闘争により勝ち取られた「権利」としての側面がある一方で、米軍からの受益もあり、基地依存の一例として捉えられてしまうこともある。このように、黙認耕作は政治的な文脈に紐づけられ、語ることの難しいものとなり、研究対象として光が当てられることはほとんどなかった。

発表者は、2018年7月から8月、10月の約3か月間、在日米軍嘉手納弾薬庫施設内知花地区（沖縄市）にて「黙認耕作」に従事し、聞き取り調査をおこなつ

キーワード：米軍基地、黙認耕作、沖縄

た。知花地区は嘉手納飛行場にほど近く、一日に何十機もの米軍機が耳をつんざく轟音を上げ上空をかすめていく。この地区的耕作者の多くは、自家消費用の野菜や果物、家畜の飼料となる草を育てていたが、発表者が手伝った耕作者を含む数軒は出荷用の肉牛繁殖をも行っていた。耕作者の大半は定年退職後の男性で、地主ではない。必ずしも地元の住民とは限らず、沖縄市近隣のうるま市や宜野湾市などから通うものも多い。

このほか、嘉手納町、読谷村字喜名、字楚辺、伊江村にて耕作者や地主数人から聞き取り調査を行った。黙認耕作を、単純に米軍への「抵抗」と言い切ることも、米軍からの「受益」とも言い切ることも、その実態をとらえているとは言い難い。「反戦地主」として、軍用地料の受け取り、契約更新を拒否して自分の土地を奪還したインフォーマントもいれば、軍用地料と黙認耕作で「二重の利益」を上げて裕福になったため基地がなくなると困るというインフォーマントもいた。しかし、黙認耕作をしつつも爆音訴訟団のメンバーとして活動するインフォーマント、辺野古新基地建設の反対や米軍、日本政府への不満を語るインフォーマントも少なくなかった。

M. プラットの「コンタクト・ゾーン」を活用した田中（2007）は、コンタクト・ゾーンを異文化を持つ他者との接触が生じ、相互関係をもたらす空間として捉えた。米軍基地の所在地としての沖縄県はまさにコンタクト・ゾーンであり、多くの在沖米軍研究においてこの関係性は示してきた。しかし、黙認耕作地については、基地以上に地域や地権、農地と人の関係などが複雑かつ重層的に絡み合う現状があり、米軍と地域という枠組みだけでは十分に描き出せない。基地が存在することで、基地—地域社会という関係性の構図がまず想定されるが、黙認耕作者を単なる基地—地域社会のコンタクト・ゾーンの中間者と見るだけでは、黙認耕作地の「語りにくさ」を克服できない。基地からの受益により基地に反対できないという「贈与交換」、また、その利益の受け取りを拒否することによって基地反対を貫く「抵抗」の二つでしか捉えられてこなかった軍用地問題および黙認耕作を、そのどちらでもない、基地との非対称的な関係性を持つ知花地区の事例を通じ、新たな関係性の提示を試みる。

【参考文献】

田中雅一

2007 「コンタクト・ゾーンの文化人類学誌へ：『帝国のまなざし』を読む」『コンタクト・ゾーン=Contact zone』1:31-43